

「探りを入れること」

——『明暗』の書き出しから——

堀 江 敏 幸

Probing Deeply:
From the Incipit of *Meian* (*Light and Dark*)

Toshiyuki HORIE

Abstract

A serialized novel is a harsh format for the writer. Sections that have already been printed cannot be changed later. The development of such a novel essentially involves groping. *Meian* (*Light and Dark*) is no exception. Thus, I shall attempt to “probe deeply” into the incipit.

今日は、『明暗』のなかからひとつかふたつの章を選んでなるべく具体的に語るという中島先生のお誘いに応じて、冒頭の第一章と第二章を印刷していただいたのですが、いま、ロズラン先生がおなじ箇所を「勾配」という言葉を用いて見事に分析されましたので、重複を避け、この場で考えたことを加えながら、当初の予定をゆっくり逸脱していくかたちでお話したいと思います。

「医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。」

これが第一章の冒頭、未完に終わった、四百字詰め原稿用紙千八百枚に及ぶ小説の、第一文になります。よけいな飾りのない、簡潔で短い文章です。何度も書き直した末にこうなったのか、もとからこうだったのかは誰にもわかりませんが、最初に言葉を置いたら、書き手はとにかく先をつづけなければなりません。少し書き進めてまた前に戻り、流れを確認しながら随時表現を微調整することはありうるにしても、残された作品の冒頭はひとつだけです。他に多くの選択肢があるなか、漱石は真っ白な原稿用紙に記す第一文をこのようにはじめてしまったわけです。逆に言えば、未完に終わったとはいえ、『明暗』はここで蒔かれた種から伸びた芽でできていることになり、それ以外ではありません。では、この文章

の入り方がちがっていたら、どんな展開になっていたでしょうか。

ロズラン先生が指摘されたとおり、「医者は」と記すだけでは、なにを専門とする医者なのか特定できません。そのあとの手術台という言葉聞いて、ようやく外科的な診療が可能な分野だとわかるのですが、もしかするとこれは本当の医者ではなくあだ名のようなもので、医者、学者、役者と呼ばれる三人が『三酔人経綸問答』さながら話を回していく、その第一段階でないともかぎりません。

第一文は、作品全体の重力に耐えうる礎石であるばかりでなく、文章の呼吸や間という芽を生やすひとつの種の、最もめざましい事例でもあります。「医者は探りを入れた後で」までを声に出して読み、そこでいったん休んでみると、その先をさまざまに展開しうることに気づかされるでしょう。同時にそれは、漱石がなぜ「医者は探りを入れた後で」と書き始めたのかを考える手がかりになるのです。

たとえば、このあと「珈琲でも飲むかね、と津田に云つた」とつづいていたら、患者が自分にとってなにか不利になりうる情報を握っていて、それを外に流そうとしているらしい、あるいは流す危険がある、だから少しかまをかけてみるのだといった文脈に押し込むことができるでしょう。探りを入れると

は、具体的な反応や回答を期待せず、うまくすればなにか情報が得られるかもしれないと思いながら語りかけることです。『国語大辞典』には、探り・捜りの第一義として、「さぐること。様子をうかがうこと」が挙げられ、ほかならぬ漱石の『虞美人草』から、『『あなたの方が姉さんよ』と藤尾は向ふで入れる搜索の綱をぷつりと切つて、逆さまに投げ帰した』という一文が引かれ、「搜索」に「さぐり」とルビが振られています。また、「探り」をもっと意識的におこなえば、「特に、敵情をさぐること。また、その者。問者。しのび。探偵」の意となり、探偵小説の書き出しとして、可も無く不可も無いものになりえます。私たちは、そして当時の漱石の読者は、『吾輩は猫である』の猫や『彼岸過迄』の敬太郎が「探り」を繰り返していた事実を知っています。「探り」は、漱石の世界において親しみのある言葉でもあるのです。

会話体になる第二文にふくまれた情報を、第一文に組み込むようなかたちで物語世界に入っていきたいと考える人もいるでしょう。「医者を探りを入れた後で、矢張穴が腸迄続いてあるんでしたと云つた」と説明しておけば、「探り」という言葉を使わず、そこに過度な意味付けをすることを回避できるからです。あるいはまた、「医者は手術台の上に横たわつた津田を見下ろして、矢張穴が腸まで続いてあるんでした、と云つた」などと改変しても、事実を伝えられた患者がどう反応するかを確かめているだけですから、「探り」という言葉を用いずに探っている状況を作り出すことができます。

しかし、これが医者の仕事そのものである医療行為であったとしたらどうでしょうか。「探り」には医療器具の意味があります。『国語大辞典』の「探り」第六義に「医療の具。創傷や腫れ物の深さをさぐってみるのに用いるもの。消息子。ゾンデ」とある、その器具です。津田を悩ませている病の診察の基本は、触診です。医者は自分の指を入れて内部の様子をうかがい、必要があれば器具を用いる。この器具が部外者にはひどく恐ろしい。「医者は探りを入れた後で」で止めたとすると、医者だけでなくこの「探り」の意味が瞬時に確定できません。相手の姿勢や態度を確かめ、その先を促すための言葉なのか、患部に入れる器具なのかの判断は、その先にゆだねられます。

実際には「手術台の上から津田を下した」となっ

ていますから、医者があだ名ではなく、本物の医者であることがすぐにわかります。新聞連載で『明暗』を読み始めた当時の読者は、筋書きなど知らされてはいません。他方、後世の読者は、『明暗』と呼ばれる小説の冒頭の数章に、漱石自身の痔の治療が活かされていることを、幸か不幸かすでに情報として持っています。では、作家自身は、はたして自分がなにをやりたいのか、どこまで見通して第一文を書きはじめたのでしょうか。創作ノートがあるとはいえ、冒頭を書いてしまったがゆえに、そうせざるをえなくなったということは、ありえないでしょうか。

小説の生理的な特徴とその後につづく文章の有機的な力は、多くの場合、第一文で決定されます。最初に置かれた言葉の胚が連鎖的に変化し、成長していくので、途中でそれを押しとどめたり、部分的に変更するのは容易ではありません。というより、最初の一語が異なれば、以後はまったくべつの言葉の反応になり、外見は似ていても別種の物語ができあがってしまいます。中間地点の調整ではなく、最初から書き直さなければ流れはよくなりません。

たまたま思いつきで置いてしまった石が、あとで大きな働きをすることがあります。いわゆる布石ですが、これは大局観にもとづいた直観的な行為と、漠然とした計算の両方が作用して、事後的な解釈によってその効果が確定されるものです。創作行為においては、計画的に配置するのではなく、なるほどここが岐路だったのかと、すべてが終わった後で見えてくる景色のなかにその石が置かれていると考えるほうが、より自然でしょう。『明暗』の冒頭にある「探り」が布石だとしても、その意味はおそらく最後まで読んだ者にしか見えて来ないので、書き手の方はまだぼんやりした霧中のうちにいるのです。しかもこの作品には終わりがありません。未完なのです。理屈のうえでは、布石は永遠にその姿を現さないこととなります。

それでも、「医者は探りを入れた後で」とはじまる第一文には、将棋の一局で言う感想戦でしか指摘できない、現場の視点と外部の視点がいりまじった、後付けの「布石」の匂いがします。ロズラン先生の「会話の勾配」という表現をお借りすれば、「探り」は「時空の勾配」と「可能性の勾配」をあらしめるものでしょう。書き手自身の可能性を自問し、開示するための装置なのです。

*

先を進めてみましょう。医者と言います。

「矢張穴が腸まで続いてゐるんです。此前探つた時は、途中で癩痕の隆起があつたので、つい其処が行き留まりだと思つて、あゝ云つたんですが、今日疎通を好くする為に、其奴をがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「さうして夫が腸迄続いてゐるんですか」

「さうです。五分位だと思つてゐたのが約一寸程あるんです」

ここでの「矢張」は、「探り」が過去の情報や先立つ予想を踏まえた二度目以後の行為であることを示しています。直後の文章でそれが委しく説明されていますが、重要なのは、津田にとって痔の治療と診察がはじめてではないという事実です。患部が患部ですから、初回かそうでないかによって、ベッドに横たわる側の恐怖感や緊張は大きく異なるでしょう。二度目だという事実を読点のあとにもってくることで、前半の密度が高まるのです。患部が悪化しているのは、そうなるまで放っておいたこと、不摂生かストレスか、そのような状態に患者を陥れた原因があることをも読者にほのめかしています。「今日疎通を好くする為に、其奴をがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」の根拠は、指先ではなく器具を触手として延ばして閉塞箇所を確かめた医者の経験ですが、こんなふうにと考えると、妻の「お延」は、なにか触手を延長させて夫の奥を探る者として、あらたな輝きを帯びそうな気さえしてきます。

ところで、「がりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」の部分からは、おそらくだれもが長く深い穴を想像するでしょう。漱石の読者がここで『坑夫』を連想したとしてもおかしくはありません。この一人称小説には、語り手が鉱山に入り、初さんという男に導かれて「疎通」された穴に入り込む場面があります。

「又胎内潜りの様な穴を抜けて、三四間宛の段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股になつてゐる。その条路の突き当りで、カラカラランと云ふ音がした。深い井戸へ石片を投げ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙に深い様に思はれた」

井戸よりも遙かに深いところまで降りて、また戻る。降りていかないかぎり、もどって来ることはできません。死んで、生き返る。胎内くぐりは生と死の双方に通じています。『坑夫』の語り手は、自分はこんな穴のなかで仕事ができるのか、暮らしていけるのかと自問しながら、ある意味どうにでもなれという感覚を抱えて「探り」を入れていきました。坑道は穴であり、管でもあります。漱石は、口から肛門へとつづく坑道の途中にある胃の病に苦しんでいました。『彼岸過迄』執筆前に見舞われた修善寺の大患は周知の出来事です。彼の作品のいくつかは、坑道や消化管のような管でつながっていると言ってもまちがいでないでしょう。漱石はこの深い穴にあえて自分で意識するための「探り」を入れ、どんな展開が待っているのかを、目算なしに確かめたい気持ちがあったように感じられます。

『明暗』の連載第一回は、大正五年五月二十六日です。一週間分ほどのストックはあったはずですが、たとえば第三回まで掲載された時点で前二回分のどこかに不備や不満を感じたとしても、誤植の訂正をするくらいが精一杯で、さかのぼって第一回から書き直すことは物理的に不可能です。言葉の流れの方向はもう変えられません。単行本化を待つ手を加えるとしても、言葉の水位は不変です。几帳面な漱石は、律儀に、一日一回分書き進めていきました。それでも冒頭で「医者を探りを入れて」と書かなかつたら、章立ても展開も残されている状態とはちがっていたはず。あのような語順で、あのように記したからこそ、「探りを入れる」行為に重きが置かれることになったのです。

*

さて、第一回で医者に行く場面の原型は、明治四十四年十二月四日の日記に記されています。

「○此朝佐藤さんへ行つて又痔の中を開けて疎通をよくしたら五分の深さと思つたものがまだ一寸程ある。途中で癩痕が瘤起してゐたのを底と間違へとゐたのださうで、其癩痕を掻き落してしまつたら一寸許りになるのださうである。しかも穴の方向が腸の方へ近寄つてゐるのだから腸へつゝいてゐるかもしれないのが甚だ心配である。凡て此穴の肛門に寄つた側はひつかゝれたあとが痛い。反対の方は何ともない。」

連載開始までもうあまり日がない。締め切りが迫ってくる。胃の調子も芳しくない。体力を温存するには、どうするべきか。しかたがない、手持ちの材料を使って、登場人物の関係図もあるのだから、とにかく仕事にとりかかろう。そんなふうにして、漱石はまとまった分量のある明治四十四年十二月の日記に頼ったのではないのでしょうか。もちろんただ書き写したのではありませんが、素材の選択においても、彼にはなんらかの予感があったはずです。痔の治療の頃の日々の記憶を用いれば、見えない言葉が動き出すはずだとの予感です。痔の描写は、『明暗』のなかに分散されることになりました。紹介するまでもないほど有名な箇所ですが、あえて示します。津田は診察のあと無言のまま帯を締め直し、袴をはいてから医者に見舞われます。

「腸迄続いてみるとすると、癒りつこないんですか」

「そんな事はありません」

医者は活潑にまた無雑作に津田の言葉を否定した。併せて彼の気分をも否定する如くに。

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上りこはないから、今度は治療法を変へて根本的の手術を一思いに遣るより外に仕方ありませんね」

「根本的の治療と云うと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」

医者はこの「根本的の治療」のために「探り」を入れたのでした。津田には、自分の内側深くに「探り」を入れる勇気も度量もありません。つねに入れられる方です。『明暗』における「探り」の動作主は医者であり、お延であり、吉川夫人であり、お秀であり、友人の小林であって、津田その人ではないのです。その点を強調するならば、第一文を「津田は探りを入れられた後、手術台の上から医者を見上げた」としてもよかったわけです。しかし漱石は、津田を受動的な位置に置きました。診察台に横たわって医師のなすがままに任せるという究極の受け身を通して、この小説そのものが受け身であること

を示したのです。

『漱石全集 第十一卷 明暗』の、十川信介氏の注解によれば、漱石は明治四十四年八月、関西で講演していたときに胃潰瘍を悪化させ、大阪の湯川病院に一ヶ月ほど入院しています。そして、入院中から臀部に異常を覚え、九月十四日に帰京したのち、神田の佐藤治療院におもむき、肛門周囲膿瘍と診断されて治療を受けます。いったんはよくなるのですが、翌大正元年の九月に病状がふたたび悪化し、痔瘻の手術を受けました。これが「根本的の治療」になります。注目すべきは、「痔を切開して以後丸で日記をつけない」とある、明治四十四年十一月の記述です。漱石の体調はすぐれませんでした。しかも同月、のちに『彼岸過迄』の第四章で描かれる娘ひな子の急死という、大きな悲劇に見舞われているのです。まったくつけていないと記されたその日から二週間以上が経過した十一月二十九日（木）に、以下のような記述が読めます。

「其通り中山さんがやつて来たが、何だか様子が可笑しいから注射をしませうと云つて注射をしたが効目がない、肛門を見ると開いている。眼を開けて照らすと瞳孔が散つてゐる。是は駄目ですと手もなく云つて仕舞ふ。何だか嘘の様な気がする」

医者は眼よりも先に肛門を調べました。死とともに、括約筋は緩みます。痔もなにもなくなり、掻き出す手間もなくなります。奇妙なことですが、「何だか嘘の様な気がする」この名状しがたい悲しみには、痔の治療の折の沈黙が張り付いているのです。娘の「死」は、彼の「痔」と対になっています。「し」に濁点があるかないかのちがいです。葬式は十二月二日（土）に行われ、娘は落合の焼き場で荼毘に付されました。

「○落合の焼場へ行く 自分、倫 [鏡子の弟、中根ひとし。この年、帝大を出たばかり]、小宮。小供の時見た記憶が少しある。一等の竈に入れて鍵を持つて帰る。(十円だけれども子供だから六円いくらで済む)」

父親の気持ちは、言葉に残されていません。具体的な行動と、こんな状況にふさわしくない金銭の話

がわざとのように書かれていて、それがかえって胸に迫ってきます。明治時代の主たる火葬の燃料は薪でした（『大日本百科全書』）。焼却には時間がかかります。夜に焼いて、骨を拾うのは翌日になるのが一般的でした。つまり、焼き場には二度行かなければならないのです。漱石夫妻は翌三日にふたたび落合に向かうのですが、そこでひとつの事件が起こります。

「○火葬場に着いて鍵はときくと妻は忘れましてといふ。愚な事だと思つて腹が立つ。家から此処迄四十分懸つてゐるから、今から取に行けば往来八十分でさうして今十時だから十一時二十分になつて仕舞ふ」

一刻も早く娘の骨を拾ってやりたいなどと漱石は書きません。痛んだ心のうちを悟られないよう、探られないようにしています。鍵は、使いをやって、時間内になんとかとどき、このあと拾骨が行われます。漱石は窯の鍵を自分であけず、「おんぼう」に任せ、夫妻は骨を「竹箸と木箸を一本宛にして」白い壺に入れていきました。「おんぼうの一人は箸で壺の中をかき交せて骨の容積を少なくする」とあるように、「探り」を入れるゾンデの代わりに、ここでは箸が幼い娘の骨を掻き出すために用いられているのです。しかし、じつのところ、掻き出されたものは痔疾でも骨でもなく、父親の心でした。日記は簡条書きのようにつづいています。

「○生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかつた。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして残つた子は入らない様に見える。」

「○表をあるいて小さい子供を見ると此子が健全に遊んでゐるのに吾子は何故生きてゐられないのかといふ不審が起る」

「○昨日不図座敷にあつた炭取を見た。此炭取は自分が外国から歸つて世帯を持ちたてにせめて炭取丈でもと思つて奇麗なのを買つて置いた。それはひな子の生れる五六年も前の事である。其炭取はまだどこも何ともなく存在してゐるのに、いくらでも代りのある炭取は依然としてあるのに、破壊してもすぐ償ふ事の出来る炭取はかうしてあるのに、かけ代のないひな子は

死んで仕舞つた。どうして炭取と代る事が出来なかつたのだらう」

慟哭と言つてもいい一節です。前夜目にした炭取の器や、羽根でできた刷毛の映像が、拾骨の場面では黒から白に色を変えてあらわれ、すでに引いた四日の記述につづいて、五日の日記には、娘の死と痔疾の話題が交互に出てくるという、やや異常な状態になります。

「○新聞を見ると官軍と革命軍の間に三日間の休戦が成立して其間に講和条約をきめるのださうである。彼等からみればひな子の死んだ事などは何でもあるまい。自分の肛門も勘定には這入るまい。」（十二月五日）

さらにその翌日には医者のところへ顕微鏡を見せてもらう記述があつて、これもまた微調整されたうえで虚構に活かされることになるのですが、痔の話題はそのまゝ娘の死に結びついているのですから、『明暗』のなかの痔疾の話題の裏には、本当はこのときの記憶も張り付いているはずなのです。これは父親の悲しみに対する「探り」を拒む一種の隠蔽でもあつたとも言えるでしょう。痔を切り、掻き落とすことはできても、悲しみの連想を断ち切ることはできません。『明暗』の書き出し＝掻き出しは、すでに命の絶えた大切な存在、いや、命が絶えてはじめてその大切さが理解できたものを掻き集めるためのゾンデだったのでした。

第一文から死と結びついていた『明暗』は、第四十章でこんな場面を迎えます。痔の手術で入院するため、津田がお延とふたり、それぞれに人力を呼んで出かけようとしたとき、「大変。忘れものがあるの」とお延が言い出します。「何だい。何を忘れたんだい」と問う津田に「思案するらしい様子を」して、「ちょっと待っててちょうだい。すぐだから」と、彼女は津田を残して自分だけ車を戻させます。戻って来ると、「帯の間から一尺ばかりの鉄製の鎖を出して長くぶら下げて見せ」ました。「其鎖の端には環があつて、環の中には大小五六個の鍵が通してあるので、鎖を高く示さうとしたお延の所作と共に、ぢやらぢやらといふ音が津田の耳に響いた」とつづいて、以下のような会話がなされます。

「是忘れたの。箆笥の上へ置きつ放しにした儘」
夫婦以外に下女しか居ない彼等の家庭では、二人揃って外出する時の用心に、大事なものに錠を卸して置いて、何方かゞ鍵丈持つて出る必要があつた。

「お前預かつておいで」

ぢやらぢやらするものを再び帯の間に押し込んだお延は、平手でぽんとその上を敲きながら、津田を見て微笑した。

「大丈夫」

俵は再び走け出した。

やや強引な解釈をすれば、娘の死の場面の痛切さは、お延が「鍵」を忘れることによって、彼らが住んでいる「家」を「窯」に、つまり一種の「火葬場」にしてしまったことに由来すると言えるかもしれません。日記の記述者は、大切な存在の死をもってなにか新しいものを得ようとしていました。娘の臨終を告げられる前、肛門が開いていたことを書き留めるその姿勢は、『明暗』で言えば医者之眼差しに近づいています。肛門は人体において自分では直接見ることのできない場所のひとつです。見えない穴です。にもかかわらず、他者にとって、とくに医者にとっては、他のどんな穴よりも見やすいところにあるのです。「極めて縁の遠いものは却つて縁の近いものだつたといふ事実が彼の眼前に現はれた」とあるその場所こそが、「探り」を入れるべき穴なのです。

もうひとつ重要なことは、「探り」を入れる医者が、第三章の、津田のお延に対する台詞のなかで「小林さん」と呼ばれている点です。津田にはおなじ名字の厄介な友人がいて、こちらの小林はお延の前に現れ、津田にべつの女の影があることをほのめかします。夫の友人ですから、お延は彼を「小林さん」と呼びますが、そうなるどちらの小林のこと言っているのか、「探り」を入れないと混乱をきたすことになるでしょう。津田にとっては、医者の方こそ「さん」づけで呼ばれる存在であって、友人はあくまで呼び捨てです。要するに、津田の心身に「探り」を入れる探偵は二人いるのです。二人の小林によって、彼は心のなかの膿みを掻き出してもらうのです。

津田は吉川夫人に促され、傷の癒えないうちにと理由をつけて、清子が湯治している湯河原へ向かいます。このとき国府津から軽便鉄道に乗るのですが、「軽便鉄道」の字面は、便を軽くし、通じを

よくする疎通の装置のようにも読めないでしょうか。清子のもとにたどり着くには、津田はこの軽便に乗り、しかも途中で「脱線」による停車を体験しなければなりません（百六十八～百七十章）。軽便とは言いつつ、便が詰まったうえに脱線までするこの小さな汽車は、第一章の「探り」を入れられたあと、診療所をでて市電に乗って帰途につく第二章を思い起こさせます。満員の電車のなか、彼は沈んだ気持ちで、「去年の疼痛」をありありと記憶に呼び覚まします。ベッドに横たえられ、鎖につながれた犬の様におびえている自分の姿を想像するのです。追い詰められた津田はふたたび「探り」を入れられ、その先にある根本的な治療を頭のなかで体験しているわけです。

漱石の弟子である松岡譲は、師が『明暗』について語りながら、「随所に埋めてある芋を、段々掘り出し乍ら行く（此時先生は口のあたりに独特の微笑を見せて、芋を掘り出す手付をされた）ことになつてのだから、その作者の意図を考へもせず批評するのは困る」と述べ、「其時の芋を掘るといはれた時の手付が今でも時々目に浮ぶ」（『明暗』の頃『漱石全集』別巻）と記しています。結局のところ、『明暗』は、「探り」を入れられた男が、「穴と腸を一所にして仕舞ふ」心の切開手術をあちこちで行い、自分のなかに眠っていた感情の芋を、言葉の芋を掘り起こしながら徐々に死に近づき、なんとか帰還しようとする話なのかもしれません。途中で道を塞いでいる隆起した瘤のような障害物を切開して取り除き、掻き出し、さらにその模様を書き出すこと。湯河原でこの先なにが起ころうとも、「天然自然割かれた面の両側が癒着」するような疎通がなされ、戻って来る動きが、ゾンデを抜く動きが付与されるはずで、そしてこの展開を予想させ、未完の長篇ぜんたいを支えているのが、「医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した」という冒頭の「探り」だったと言えるのではないのでしょうか。

*本文引用はすべて『漱石全集』（全二十八巻、岩波書店）による。

参考文献

- *内田道雄『夏目漱石『明暗』まで』（おうふう、一九九八年）
- *小島信夫『批評集成 8 漱石を読む』（水声社、

二〇一〇年)

- * 坂口曜子『蹟きとしての文学 漱石「明暗」論』
(河出書房新社、一九八九年)
- * 蓮實重彦『夏日漱石論』(青土社、一九七八年)